

ヨハネ18：1-40「英雄と臆病者」

18:1 イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケデロンの川筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこに入られた。18:2 ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。18:3 そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。18:4 イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。18:5 彼らは、「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。18:6 イエスが彼らに、「それはわたしです」と言われたとき、彼らはあとずさりし、そして地に倒れた。18:7 そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。18:8 イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」18:9 それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とイエスが言われたことばが実現するためであった。18:10 シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とす。そのしもべの名はマルコスであった。18:11 そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」18:12 そこで、一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人から送られた役人たちは、イエスを捕らえて縛り、18:13 まずアンナスのところに連れて行った。彼がその年の大祭司カヤパのしゅうとだったからである。18:14 カヤパは、ひとりの人が民に代わって死ぬことが得策である、とユダヤ人に助言した人である。18:15 シモン・ペテロともうひとりの弟子は、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いで、イエスといっしょに大祭司の中庭に入った。18:16 しかし、ペテロは外で門のところに立っていた。それで、大祭司の知り合いである、もうひとりの弟子が出て来て、門番の女に話して、ペテロを連れて入った。18:17 すると、門番のはしためがペテロに、「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね」と言った。ペテロは、「そんな者ではない」と言った。18:18 寒かったので、しもべたちや役人たちは、炭火をおこし、そこに立って暖まっていた。ペテロも彼らといっしょに、立って暖まっていた。18:19 そこで、大祭司はイエスに、弟子たちのこと、また、教えのことについて尋問した。18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かって公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まって来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。18:21 なぜ、あなたはわたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、わたしから聞いた人たちに尋ねなさい。彼らならわたしが話した事がらを知っています。」18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた役人のひとりが、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。18:23 イエスは彼に答えられた。「もしわたしの言ったことが悪いなら、その悪い証拠を示しなさい。しかし、もし正しいなら、なぜ、わたしを打つのか。」18:24 アンナスはイエスを、縛ったままで大祭司カヤパのところに送った。18:25 一方、シモン・ペテロは立って、暖まっていた。すると、人々は彼に言った。「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね。」ペテロは否定して、「そんな者ではない」と言った。18:26 大祭司のしもべのひとりで、ペテロに耳を切り落とされた人の親類に当たる者が言った。「私が見なかったとでもいうのですか。あなたは園であの人といっしょにいました。」18:27 それで、ペテロはもう一度否定した。するとすぐ鶏が鳴いた。18:28 さて、彼らはイエスを、カヤパのところから総督官邸に連れて行った。時は明け方であった。彼らは、過越の食事が食べられなくなることをないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかった。18:29 そこで、ピラトは彼らのところに出て来て言った。「あなたがたは、この人に対して何を告発するのですか。」18:30 彼らはピラトに答えた。「もしこの人が悪いことをしていなかったら、私たちはこの人をあなたに引き渡しはしなかったでしょう。」18:31 そこでピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい。」ユダヤ人たちは彼に言った。「私たちには、だれを死刑にすることも許されてはいません。」18:32 これは、ご自分がどのような死に方をされるのかを示して話されたイエスのことばが成就するためであった。18:33 そこで、ピラトはもう一度官邸に入って、イエスを呼んで言った。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」18:34 イエスは答えられた。「あなたは、自分でそのことを言っているのですか。それともほかの人が、あなたにわたしのことを話したのですか。」18:35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人ではないでしょう。あ

あなたの同国人と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのです。あなたは何をしたのですか。」 18:36 イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」 18:37 そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」 イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりにです。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」 18:38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」 彼はこう言う前から、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。 18:39 しかし、過越の祭りに、私があなたがたのためにひとりの者を釈放するのがならわしになっています。それで、あなたがたのために、ユダヤ人の王を釈放することにしましょうか。」 18:40 すると彼らはみな、また大声をあげて、「この人ではない。バラバだ」と言った。このバラバは強盗であった。

導入

一年前に始めたシリーズ説教を完成させるため、今週からヨハネの福音書の学びに戻ります。

ヨハネの福音書のシリーズ説教の第一回目に、ヨハネがこの福音書を記した理由について学びました。その理由は、ヨハネ20：30-31に記されています。

ヨハネ 20：30-31 20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。 20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

イエス・キリストを神の御子と信じるなら、このお方の御名によって私たちは新しいいのちを得ます。そのいのちは、永遠のいのちです。それがどれだけ素晴らしいかを余すところなく経験できるのは、天国に行ってからです。しかし、私たちを造ってくださった創造主なる神と一対一の関係を築き、心の奥深くに安らぎを得ることはできます。

ヨハネが約束するいのちは、この地上で始まります。しかも、保証つきです。この保証を、聖書は聖霊と呼びます。聖霊は、天国で受ける未来の祝福を保証してくれます。(エペソ1：14)

ですから、ヨハネがこの福音書を記したのは、イエスを信じ、今生きているこの世で「新しいいのち」を享受し、天国に行ったあかつきにはすべての祝福に与るよう、私たちに促すためです。

このことを念頭に、今後4週間、ヨハネの福音書の最後の4章を学んでいきましょう。

18章はかなり長いので、ヨハネが教えてくれることの中からおもに3つの出来事に注目したいと思います。

最初に、ゲツセマネの園でイエスが裏切られて捕らえられたこと、次に、ペテロが三度イエスを知らないと言ったこと、そして、イエスがピラトの法廷で裁かれたことです。

1. ゲツセマネの園でイエスが裏切られ、捕らえられる。(1-14節)

1節には、「イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、・・・出て行かれた。・・・」とあります。

この直前、イエスは二階の広間でご自身の死について詳しく弟子たちに教えておられたことをしっかり踏まえておきましょう。教えの内容は、ご自身が死なれる意味や、死によって成就することについてです。(13-17章)そして18章で、イエスは外の世界に出ていき、ご自身が直面しておられる現実の状況で自らの教えを実践なさいます。

イエスは、神のみことばの知識を弟子たちに教えただけでなく、ご自身の人生で実践なさいました。

多くのクリスチャンは、神のみことばの教えを感謝して受け取りますが、それを実生活に当てはめようとしない傾向があります。

なぜでしょう。

簡単に言うと、神のみことばに従うには、必ず犠牲が伴うからです。

居心地のよい状態を脱して、さらなるクリスチャンとしての献身を迫られるからです。

バンジージャンプのようなものです。安全だとわかっているけど、最初に飛ぶときはとても怖いんです。

けれども、実生活にあてはめるまでは本当に神のみことばを信頼しているとは言えません。一旦、神のみことばに従って実行すれば、私たちの生活の中で神がもっとリアルな存在となります。

信仰が強められ、これからも神のみことばに従っていこうという気になれます。

イエスについていくのは簡単なことではありません。しかし、従って歩む一步一步に祝福があります。その祝福は、どんな犠牲にも勝ります。

イエスに従う人には、神のご臨在を身近に感じられると約束されています。これ以上にすばらしいことはありません。

詩篇16：11は、「あなたの御前には喜びが満ち、」と語ります。ヨハネ14：21で、イエスの戒めを守る人にはご自身を現してくださるとイエスが約束しておられます。

この第一部で大切な部分は、11節です。

18:11 そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」

ペテロが大祭司のしもべを攻撃し、右耳を切り落としました。イエスはその行為を諫め、御父に与えられた「杯を飲む」ときが来たとおっしゃいます。

これはどういう意味でしょう。

旧約聖書で御父に与えられた杯を飲むというのは、良い意味も悪い意味もあります。詩篇では、神の祝福と救いを指して用いられます。

詩篇 23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

詩篇 116:13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。

しかし、詩篇やその他の箇所では、神に与えられた杯が神の怒りの杯を指す強調表現でもあります。

イザヤ 51:17 さめよ。さめよ。立ち上がれ。エルサレム。あなたは、【主】の手から、憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した。

エレミヤ 25：15-16 25:15 まことにイスラエルの神、【主】は、私にこう仰せられた。「この憤りのぶどう酒の杯をわたしの手から取り、わたしがあなたを遣わすすべての国々に、これを飲ませよ。25:16 彼らは飲んで、ふらつき、狂ったようになる。わたしが彼らの間に送る剣のためである。」

詩篇 75:8 【主】の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう。

今日のみことばでは、悪い意味での神に与えられた杯と捉える必要があります。

この杯から飲むことについて、参照個所が強調する重要なポイントがあります。

それは、この杯に神の御怒りが部分的に入っているのではなく、神の御怒りがいっぱい満ちていることです。

この杯には、怒りがたっぷり注がれ、あふれているのです。

ここでイエスは、父なる神がイエスのために備えられた御怒りをすべてしっかりと受ける覚悟があることを公言なさいました。

これは驚くべき発言です。このイエスの言葉は、じっくり考えなければなりません。

イエスは、従順でいるために自らがどのような犠牲を払うことになるかよくご存知でした。

この18章の出来事のすべてにおいて、イエスは神のみこころに従いとおされました。

ヨハネ 1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

世の罪を取り除くためには、イエスが人類の罪のために神の御怒りを受けなければなりませんでした。

それまでは、必要なのは汚れのない動物のいけにえでした。動物の血が人間の罪を覆う役割をしていたからです。罪を犯した人の身代わりに、動物が死んだわけです。

ここで、神の小羊であるイエスは、身代わりの死を遂げるだけでなく、神の御怒りに満ちた杯を受けようとしておられたのです。

イエスに注がれた神の御怒りについて考えると、怖くなります。けれども、それが私たちのせいであって、必要なことであつたと考えれば、もっと恐ろしくなります。

神であり人であるイエスは、それほど恐ろしいことが待ち受けていたにも関わらず、私たちが受けるべき罰に服してくださいました。なんとすばらしいことでしょう。

私たちが赦され、義と認められるために、神の御怒りに満ちた杯がイエスに注がれたのです。

Ⅱコリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であつて、神の義となるためです。

9節で、イエスは「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とおっしゃいます。イエスは、自ら進んでご自身をローマ帝国に渡されました。それは、ご自身の死によって益を受ける人々を救うためです。

英雄であるお方の話から、次は臆病者の話に進みます。

2. ペテロがイエスを知らないと言う。(15-18節、25-27節)

ヨハネは、ペテロがイエスを知らないと言った出来事をふたつに分けて記し、間にイエスと大祭司の会話を挟みます。なぜでしょう。

おそらく、人間的な観点ではイエスの働きが失敗に終わったように見えることをヨハネは指摘したかったのではないのでしょうか。イエスのもっとも忠実なしもべが、イエスを知らないと言ったのですから。

第二部で大切な部分は、14節です。

ヨハネ18:14 カヤパは、ひとりの人が民に代わって死ぬことが得策である、とユダヤ人に助言した人である。

11：48を読んでみましょう。

ヨハネ 11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」

ユダヤ人指導者が恐れていたのは、イエスの人気が高まり、彼らの権威が揺らがされてユダヤ民族が失われることでした。ペテロがイエスを知らないと言った出来事の中に大祭司との会話を登場させることで、人間的な観点ではユダヤ人指導者の懸念はもはや不要であると、ヨハネは指摘したかったのでしょう。

人間的な観点ではイエスの働きが失敗に終わったように見えました。

しかし、聖書からも個人の経験からも、人間の失敗に神がご計画をお持ちであることは明らかです。神は、人の心を変えることで、状況も変えることがおできになります。

ペテロが三度イエスを知らないと言った出来事から、私たちは何を学べるでしょうか。

まず、ヨハネ13：36-38を読むと、ペテロがイエスを知らないということを、イエスがあらかじめ知っておられたことがわかります。

ヨハネ 13：36-38 13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」 13:37 ペテロはイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」 13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

ペテロがイエスを知らないと言ったことは、イエスにとって不意の出来事ではありませんでした。

人間的なレベルでは、ペテロは非常に忠実な弟子でした。イエスを愛し、熱心についていきました。しかし、聖霊の油注ぎと満たしがなければペテロが何もできないことを、イエスはご存知でした。

次に、ペテロがイエスを知らないと言った語調は、徐々にその強さを増します。日本語ではわかりにくいですが、ギリシャ語ではそれが明らかです。

17節で、ペテロは女中に向かって、イエスのことを知らないと言っています。

女中は下層階級でした。そのような人に問いかけても、ペテロはそれほど恐れなかったでしょう。それでも、イエスを知らないと言いました。女中は納得しました。

二度目は25節で、炭火にあたって温まろうと集まっている人々の中で、ペテロはイエスを知らないと言いました。これは、先ほどよりも難しい状況でしょう。もしペテロがイエスを知っていると認めたら、群衆から敵意を向けられるからです。ですから、語調を強めて説得力を持たせる必要がありました。

26節は最難関でした。ペテロに耳を切り落とされた人の親類が、ペテロに向かって「私が見なかったとでもいうのですか。あなたは園であの人といっしょにいました。」と言いました。

ペテロがイエスを知らないと言うたびに、その心は頑なになりました。

私たちも同じです。イエスを拒絶したり、知らないふりをしたり、明らかにイエスが命じられたことに背いたりすると、私たちの心も頑なになります。

ヘブル4：7には、「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」とあります。これは、詩篇95：7-8の引用です。

これほどイエスのすぐそばを歩んでいた人の心が頑なになるなら、私たちはなおさら、そうならないように気をつけなければなりません。

ペテロは、自分が知る以上にイエスが自分のことをご存じだということに気づきました。イエスがすべてを御手の中に支配しておられることもわかったでしょう。イエスを知らないなどと言うつもりはなかったのに、イエスが前もっておっしゃったとおりになっていました。

最初から最後まですべてをご存じなのはイエスだけです。ですから、このお方のことばは信頼できるのです。イエスは、私たちの始まりから終わりまでをご存知です。だから、私たちはこのお方を信用することができます。

ペテロがイエスを知らないと言った出来事からわかる3つめのことは、その状態が長くは続かなかったということです。

マタイの福音書26：75には、「そこでペテロは、『鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います』とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。」とあります。

突然、頑なだったペテロの心が痛み、ペテロは罪悪感にさいなまれて悔い改めました。

自分の過ちに気付いて、申し訳なく思ったのです。

聖書は、神のみこころに添った悲しみは悔い改めを生じさせると教えます。ペテロは心から悔い改めていました。

心から主を信じる信徒にとって、失敗は人生の終わりではないということは大きな慰めです。過ちを犯してイエスを拒絶した信徒のことも、イエスは再び受け入れてくださいます。ルカ15章の放蕩息子の話は、そのよい一例です。

3. ピラトの官邸で裁かれるイエス (28-40節)

イエスの裁きで、ふたつのことが明らかになります。「イエスの王権」と「ユダヤ人の動機の表面化」です。

イエスは大祭司の尋問を受けた後、ピラトの官邸に連行されました。

ローマ帝国の総督は、過越しの期間中、エルサレムの官邸に滞在するのが常でした。何か問題が起こった時にすぐに対処するためです。

過越しはユダヤ暦の中でも重要な祝祭で、ローマ帝国に対する反乱が起こるとすれば、この時期が一番可能性の高い時でした。

ユダヤ人指導者たちはイエスをピラトに引き渡しましたが、官邸に入ろうとはしませんでした。異邦人と接触して汚れ、過越しに参加できなくなることを恐れたのです。

まずピラトが知ろうとしたのは、「イエスが問われている罪状」でした。

30節で、彼らはこの問いに答えていません。ただ、犯罪人だと言っただけです。

31節で、ピラトはユダヤ人たち自身でイエスを裁くよう説得を試みます。

ここで、ユダヤ人指導者たちは、イエスに対してローマ帝国の死刑を要求します。

こうして、ピラトはイエスと話し始めます。裁きにおけるふたつの主題がありますが、ここでひとつめの主題であるイエスの王権が登場します。

33節で、ピラトはイエスに面と向かって「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」と尋ねます。

イエスは、この問いに直接的な答えはなさいませんでした。ピラトの質問の意図を探ろうとしておられるような返答でした。ピラトは、ユダヤ人指導者たちの主張をただ繰り返しているだけでしょうか。それとも、この状況に関心があるのでしょうか。

言い換えるなら、ピラトに直接的な害のある可能性があるのか、それともただユダヤ人同士のもめごとなのか、ということです。

イエスは、ピラト自身がそれをはっきりさせるよう仕向けられました。

ピラトがこの内容をローマ帝国の王と捉えるなら、イエスは反逆者と見なされます。しかし、ユダヤ人の王であれば、話は別です。

ピラトの35節の答えから、ピラトがイエスをユダヤ人の王と考えたことがわかります。

36-37節で、イエスはピラトに、自分は王だがこの世の王ではなく「霊の王」だと説明なさいませぬ。

そして、この世の王国なら、イエスのしもべがイエスを守ろうと戦っただろうと言われ、続けて、ご自身の御国の使命のために生まれてこの世に来たとおっしゃいました。

こう説明することで、イエスはご自身の人間性とともにも神性を明かしておられます。お生まれになったことが人間性をあらわし、この世に来られたことが神性をあらわすのです。

イエスは、「真理」をあかしするためにこの世に来たとピラトにおっしゃいました。

そして、真理に属する者は王なるイエスの声に聞き従う、とピラトに仰せられました。

イエスはピラトに真理を証するためにこの世に来たとおっしゃいました。

イエスは、神についての真理を語るためにこの世に来られました。また、私たち自身についての真理、いのちについての真理も語るためにこの世に来られました

聖書は非常に正直な書物です。創世記から黙示録まで真実を語ります。

ピラトはイエスに「真理とは何ですか。」と尋ね、ユダヤ人の前に出て行って、「私は、あの人には罪を認めません。」と言いました。

ピラトは、イエスが「真理」と判断したわけです。イエスはご自身について、またご自身の「霊の王国」について、真実を語られました。

39-40節で、ピラトはイエスを釈放しようとしします。過越しの祭りに受刑者を釈放するのが習慣だったので、ピラトはユダヤ人の王イエスを釈放しようとして提案しました。

しかし、群衆はこれを拒み、代わりに犯罪者バラバを釈放するよう要求しました。

では次に、イエスを死に追いやろうとしたユダヤ人の動機についてお話ししましょう。

ピラトがイエスを無罪と宣言したことで、イエスを死刑にしたかった本当の動機が表面化します。

ユダヤ人指導者たちは、有罪であった犯罪者を釈放し、代わりに、無罪と宣言されたイエスを死刑に処すことを望みました。

群衆が真理の味方でなかったことは明らかです。イエスの霊の王国に入る気はありませんでした。

イエスによる「天国の支配」を受け入れなかったのです。

適用

ここにいるすべての人にあてはまることがあります。それは、「真理」と「王国」の問題です。

私たちは皆、はっきりとした二者択一の選択肢が与えられています。ひとつめは、イエスについてのメッセージを真理であると信じ、今の人生でも未来の霊の王国でもこのお方に従うという選択肢です。もう一方は、イエスも霊の王国も受け入れず、絶えず変化するこの世の支配に身をゆだね、この世の支配者を王とするという選択肢です。

そうすると、この世の主人に忠誠を誓い、従うことになります。

政治家の公約を信じ、イエスの約束を拒絶することになります。

皆さんに、イエスを信じて、イエスの天の王国を受け入れるようお勧めするのは、私の責任です。

イエスは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とおっしゃいました。

正しい道を進み、いのちについての真理を知りたいと思うなら、イエスを信じなければなりません。あなたは誰を信じていますか。それは、イエスでしょうか。それとも他の誰かでしょうか。